



ミスター Mr. スクエアの選択

～男は「つらいよ」から「自分らしく一步」を～

「一億総活躍時代」がうたわれ、女性の社会進出が進み、既婚男性は積極的な家事育児への参加を求められるようになりました。確かに「男は仕事、女は家庭」という意識は少なくなりましたが、実態は追いついていないのが現状です。仕事に追われ、家事育児に十分参加できず、まさに「男はつらいよ」状態です。育児休業の取りづらさ、長時間労働、自殺、過労死等、「男性の問題」の背景には今まで求められてきた「男らしさ」の縛りがみえます。それまでとは違う視点をもって困難を新しい喜びに変え、しなやかに力強く今を歩んでいる「Mr. スクエア」と呼びたい男性の方々を紹介します。

(桑山)



男性学に目を向けてみると

「男はつらいよ」

男性学とは、男性社会を男性の視点で考え、男性にとってより生きやすい社会を構想するための学問です。女性の視点から男性社会を批判的に解剖しようとする女性学に対応する形で、1970年代に米国で生まれました。

日本では1980年代後半に取り上げる人が出てきました。京都大学名誉教授の伊藤公雄さんはその第一人者です。「女性が抑圧されてきたのは確かだが、一方必ずしも男性が豊かで満ち足りた人生を送ってきたわけでもない。『男らしくあれ』という圧力に窮屈な思いをした結果、引きこもり、過労死、中高年自殺に至った人は少なくない」と語ります。

「男は外、女は家」はどこから

欧米でも日本でも近代産業が始まる以前は、仕事である稼業も家事も主に家族総出で行う共同作業でした。妊娠、出産、育児もあり、家事は女性がより担いがちではありましたが、明確な役割分担でもなかったのです。

ところが産業革命が起こり、近代的な工業生産が始まって労働力を集める必要から男性が工場や会社を集められ、妊娠出産で仕事の中断を余儀なくされ

る女性が排除され家庭に入るようになりしました。

日本でこの男女の役割分業が進み、定着したのは1970年代から80年代。男性が長時間働き、女性が家事育児をしながら低賃金のパート労働をするという仕組みで、日本は経済成長しました。これがある種の成功体験として定着した中高年層はそこから抜け出すことが難しく、どんどん進む女性の社会進出との間で齟齬を生みました。

「男らしさ」から自由へ

現在、超高齢社会を迎えた日本では、女性も重要な働き手であり、社会経済を支える力です。男性は、身体的、精神的、経済的に強くあるべきと求められてきました。この「男らしさ」に縛られず、性差なく適材適所で仕事、家事、育児、社会活動を分担し、また女性も男性への依存心を捨て、より経済的、精神的に自立すれば、男女はもっと互いを理解し合うことができ、自由で豊かになると伊藤さんは提言します。

1991年には「男だつて自由に生きたい」と考える関西の男性5人が「メンズリブ研究会」を立ち上げました。4・5頁に原稿を寄せてくださった中村彰さんもそのおひとりです。他にも、「育時連」や「ファザリング・ジャパン」等のように、育児をきっかけに市民活

動を始めた男性たちもいます。

「男が働かない、いいじゃないか!」

若手の男性学者、大正大学准教授の田中俊之さんはわかりやすい言葉で親しみやすく語ります。ここでいう「男が働かない」は男性が賃金を得て働かず、主夫として家事労働をするのもよいということですよ。

スポーツ選手や宇宙飛行士等、世間で有名な仕事をなすのは1%くらい。現実には、公務員や会社員になるのも狭き門です。「大きな夢を持ち、強く男らしくあれ」と思ったままですと、現実には苦しいばかり。従来の性別役割分業の価値観を捨て、しなやかに生きようと薦めます。

多様な価値観を認めてしなやかに

ブラック企業の正社員でいるなら、正しい雇用のアルバイトの方がいい。夫より妻が高収入でも全く問題ないし、イクメンになりたいのに仕事が過重なら、職場が協力的体制を整えるといい、と田中さん。

男性も自分の弱みをさらけ出し、人の弱さを受け入れ、互いに認め合えば、困難に心が折れてしまうことは少なく、しなやかにかえって強く生きられるのではないのでしょうか。

(桑山)



男性学を拓いた人、それとは知らずにそこにうたわれるような暮らしを始めた人、それぞれに分岐点で自分がいいと感じた道を選んでいきます。自然体で「自分らしく」生きる、素敵だと思えます。